

表彰理由

●模範難民定住者

(順不同、敬称略)

<p>PHAM THANH LINH (ファム タン リン)</p>	<p>昭和45(1970)年2月に私費留学生として来日し大学で学んでいたが、ベトナム戦争終結後に帰国できなくなり日本への定住を決意した。国連難民高等弁務官事務所からの依頼を受け、南は沖縄から北は北海道に至るまでポートピアールとして上陸したベトナム難民の支援活動に奔走した。難民の受入れ当初、語学力のある通訳可能な者が国内にはほとんどいなかったため、数少ない優秀な通訳者として約10年間、入国管理局や民間支援団体等の書類の作成・整理に従事した。</p> <p>昭和58(1983)年、アルバイトで身に付けた印刷技術の知識・能力と難民支援に携わった神父等の指導により、教科書やレポート等を印刷・出版する事業を立ち上げ、ベトナム、カンボジア、ラオスの3カ国の教科書を発行し、長きに亘りインドシナ難民が学ぶ教科書の開発や翻訳に携わり、インドシナ難民の教育向上に大きく貢献した。現在は主に旅行を取り扱う業務形態に変更し、ベトナムと日本両国の文化交流、相互理解の一助となっている。</p>
<p>VONGPADITH BOUNPHENG (ボンパデット ブンベン)</p>	<p>昭和62(1987)年に大和定住促進センターを退所後、家計を助けるため、3人の幼い子どもを育てながら内職に従事。子育てが一段落すると、正社員として現在の会社で働くようになり、本年で13年目を迎える。同僚への細やかな心遣いと真面目な働きぶりにより職場で厚い信頼を得ている。自らの子育て体験から、家族や同国人が日本で仲良く平穏な生活を送るためには、母国文化に基づいた同国人の交流が大事であると考え、同胞コミュニティの形成と行事の開催に積極的に参画してきた。</p> <p>行事の中で母国伝統の舞踊や芸能を披露することを提案する等、自ら主体的に取り組んできたことに対し同胞からの信頼は厚い。特に「日本定住難民とのつどい」を通して、日本で生まれ育った難民2世の子どもたちにも伝統舞踊を継承することに粘り強く取り組み、家族や同国人、コミュニティ全体の親睦を深め、相互扶助に寄与してきた。また、ラオス文化センターの設立当初より同胞コミュニティの副会長である夫とともに常に二人三脚で歩み、婦人会の中心的役割を担っており、その精力的な活動は同胞の模範としてコミュニティから高く称賛されている。</p>
<p>今 洋一郎</p>	<p>平成5(1993)年3月に大和定住促進センターを退所後、バン製造工として働きながら苦学の末に平成7(1995)年に日本工業大学機械工学部に入学。</p> <p>卒業後は大手企業に就職したものの、技術者として更なる活躍の場を求め、現在は中堅規模の自動車製造会社で全ての作業行程に精通した作業技術者として活躍している。</p> <p>また相模原市内を中心としたカンボジアコミュニティ「クメールボランティア協会」の中心的人物として文化継承や地域行事の開催に尽力している他、地元埼玉県では同胞への支援に奔走し、同国人コミュニティや地域の人々から高い評価を得ている。</p>

●難民雇用事業所

<p>株式会社バナマシューズ 代表取締役 山田 雅暁</p>	<p>平成24(2012)年4月、第三国定住の趣旨に賛同し、受け入れを即決し、その年に第2陣の男性4名を職場適応訓練を経て雇用。受入後は難民が一日も早く靴職人として立ち立てるよう会社をあげて支援を行っている。工場長らがマンツーマンで技術を徹底指導した結果、職場適応訓練終了後には目標以上の月収を得るまでに成長。その後、第5陣の男性2名及び夜間中学生1名を追加的に受け入れている。</p> <p>靴製造の技術指導のみならず、公私にわたり難民従業員に目配りを欠かさず、温かく見守ってくれている。こうした社長の人柄に信頼を寄せる難民従業員は現在まで一人も退職することなく勤務している。また、難民事業本部が行う啓発活動のスタディツアーや国会議員、国際機関などの視察の受入れにも理解を示し、毎回快よく対応してくれている。</p>
------------------------------------	---

●支援協力者

<p>華道 宣秀流家元 塚本 宣江</p>	<p>華道の家元として昭和53(1978)年から37年間アジア諸国社会福祉関係者招聘事業に協力された。社会福祉関係者のべ1,731名へ華道の指導を行い、日本文化の紹介に貢献している。</p>
<p>横浜市立上飯田中学校 校長 萩原 淳</p>	<p>同校は神奈川県営いちよう団地や市営上飯田住宅を校区にしており、団地にはインドシナ難民が約1,400名居住している。全校生徒のうち外国籍および外国につながる生徒は約31%、98名が在籍。卒業生には日本国籍を取得し国家試験に合格する者や一流と呼ばれる企業の一線で活躍する者も大勢おり、後に続く定住難民の励みになっている。日本語の読み書きが出来ない生徒に対し、空き時間がある教師が国際教室で一对一の日本語や教科指導を行い高校進学を目指している。さらに国際教室はベトナム語通訳が週1回翻訳、通訳を行っており、保護者が日本の教育システムが分からないときには国際支援員が週に1~2回生活面での相談や問題に応じている。年3回行われている三者面談では日本語の不自由な生徒や保護者に全て通訳をつけており、日本の教育制度や状況をよく理解できるようになっている。</p>
<p>特定非営利活動法人 かながわ難民定住援助協会 会員 国枝 智樹</p>	<p>高校在学中よりインドシナ難民支援のボランティア活動に携わり、現在までの活動歴は15年の長期に亘る。神奈川県横浜市や大和市の難民が集住する公営団地を中心に活動する「上飯田親子の日本語教室」と「受験教室あけほの」において、難民子女の日本語や学習支援に熱心に取り組むほか、地域行事等で難民子女が日本人児童と打ち解けあい活躍できるよう親身になって支援をした。現在は、IT機器のスペシャリストとして、主に難民に関する情報誌・広報誌の作成等にボランティアとして携わり、広報活動を通じて難民理解の輪を広げている。多忙な中でも一貫して支援に携わる姿勢に、難民と地域支援者の双方から頼れる存在として高い評価を得ている。</p>